ルールや環境から直接決定されないものとしての実践
—女性競技者による車椅子バスケットボールの場合—

藤野　久美子
樫田　美雄※

※神戸市看護大学看護学部
※コレスポンディング・オーサー
kashida.yoshio@nifty.ne.jp

Practice as not directly defined from Rules and Environment
: In case of Wheelchair Basketball by Female Athletes

FUJINO,　Kumiko
KASHIDA,　Yoshio※
※Kobe City College of Nursing

Key words: Disability, Wheelchair Basketball, Female Athletes

1.　はじめに−思わざる効果研究としての女性競技者車椅子バスケットボール研究−

障害者スポーツの諸競技の中でも，車椅子バスケットボールは，海外にはプロリーグも存在し，パラリンピックの事前宣伝のテレビ番組でも取り上げられるいくつかの競技に含まれるように，注目度の高い人気スポーツであるといえるだろう．さらに，もともとはたしかに「障害者スポーツ」のひとつとして始まったものではあるが，近年では車椅子バスケットボールという競技そのものの面白さから，健常者競技者を含めた大学リーグなどもできてきており，スポーツとしての裾野を拡げつつある．

ただし，本稿では，健常者競技者については扱わず，障害者として車椅子バスケットボールを行っている競技者のみを研究対象として取り扱うこととする．理由としては，いまだ，パラリンピックへの出場に関しては，身体障害者であることが要件になっているからである．

我々は今回の論文では，障害者スポーツ，とくに車椅子バスケットボールにおいて，管見のかぎり，ジェンダー視点の研究がないことに鑑み，車椅子バスケットボールをやっている女性競技者に関する調査を行った．この調査をはじめてすぐに，競技人口を男女で比べた時，女性競技者の方が圧倒的に少なく，そのことが，練習環境や試合環境に

大きく影響していることを知った．具体的には，女性競技者の場合，ひとつの都道府県では，チームを組んで練習をするだけの競技者を集めることが困難であり，関西の場合は，府県をまたいでチームを編成して練習しているという実態がわかった．もちろん男子選手もそれほど多くはないのだが，一つの地方に複数の男子チームが成立して，男子チーム同士で練習試合ができる程度には，競技者が存在している．

そこで，我々は，仮説として，女性競技者チームはこの不利さをさまざまな工夫で乗り越えようとしているはずだ，と考えた．この仮説に裏付けを得るべく，練習場面にお伺いし，練習を観察するとともに，何人かの選手の方には，インタビューに応じていただいた．その結果，たしかに，上記のように，女性競技者には一定の不利な環境はあるものの，その環境を逆利用して（たとえば，男子チームを外国チームに模した練習試合をするような形で）国際試合対策をしているというような実態もあることがわかった．つまり，「思わざる効果」的意味連関が，女性競技者車椅子バスケットボールに関して，発見されたのである．

本稿では，以下の章で，この「思わざる効果」にいたる議論を縦軸に，横軸には，環境から直接的に実践が規定されていないという点では同種の多様なことがらにふれながら，我々の調査結果を総合的に述べていくこととしたい．

2.　競技としての車椅子バスケットボールと日本における女性競技者の状況

車椅子バスケットボールの始まりは，米国で，1940 年代頃と考えられている．ルールは，かなりの部分，健常者のバスケットボールと揃えられているが，ドリブル関係のルールや，チーム編成のルール（得点制）には，車椅子バスケットボールの特徴がある．日本では「1960 年に厚生省の派遣でストークマンデビル病院国立脊髄損傷センターに於いてスポーツ・リハビリテーションを学んだ国立別府病院の中村裕博士によって，大分県の国立別府病院で紹介されたのが最初」（日本車椅子バスケットボール連盟 HP）と言われている．

日本の女性競技者による車椅子バスケットボールの起源については，はっきりとした記録はないが，1990 年に女子大会が神戸において始まっていることや，女子チームの北京パラリンピックへの出場が果たされていることから，20 世紀末には，女子のチームが編成されるようになったと考えられる．つまり，女子車椅子バスケットボールの成立については，ここ 30 年ほどのことであると考えられる．

なお，車椅子バスケットボールは障害者だけでなく健常者も参加するようになってきており，近畿ではあじさい杯という女子の大会で障害者チームと健常者主体チームが対戦をしている．また，車椅子バスケットボール大学連盟は，基本的にクラス分けをせず，健常者を含んだチームで競技を行っている．

3.　先行研究の検討

ルールや環境から直接決定されないものとしての実践

3-1　車椅子バスケットボールの持ち点制の面白さ

先行研究としては，渡（2012）が最重要である．渡は車椅子バスケットボールという競技を，従来の，リハビリやレクリエーションのために，健常者のスポーツを障害者もできるように変形させたもののひとつである，という見方，すなわち，アダプテッド・スポーツのひとつである，という捉え方から，解放するべきだという．そして，この競技そのものが持つ魅力を把握するべきだという．そのために，ルールの分析や競技者のインタビューを実施している．我々が本論文を作成する際に特に注目したのは，渡が行った，車椅子バスケットボールの持ち点制ルールの分析の部分である．車椅子バスケットボールには持ち点制があり，各人には，それぞれが有している障害の程度やそれにともなう身体機能の高低により 1.0～4.5 点の持ち点が与えられる．そして，コート上で活動しているチームのプレーヤー５人全員の持ち点の総合計が，14.0 点以内でなければならない，というルールがある．

表１：車椅子バスケットボールにおける持ち点と選手の身体の関係

持ち点	身体の状態
1.0	腹筋・背筋の機能が無く座位バランスがとれない為，背もたれから離れたプレーはできません．体幹の保持やバランスを崩して元の位置に戻す時，上肢(手)を使います．脊髄損傷では第 7 胸髄損傷以上の選手で，基本的に体幹を回旋する事ができません．
2.0	腹筋・背筋の機能がある程度残存している為，前傾姿勢がとれます．体幹を回旋する事ができる為，ボールを受けたりパスしたりする方向に体幹の上部を向けることができます．脊髄損傷では第 10 胸髄から第 1 腰髄損傷までの選手ですが，残存能力には個人差があります．
3.0	下肢にわずかな筋力の残存があり，足を閉じることができます．骨盤固定が可能となるため深い前傾から手を使わずにすばやく上体を起こすことができます．第 2 腰髄から第 4 腰髄損傷の選手及び両大腿切断者で断端長が 2 分の 1 以下の選手です．
4.0	股関節の外転を使って，少なくとも片側への体幹の側屈運動ができます．第 5 腰髄以下の選手及び両大腿切断で断端長が 3 分の 2 以上の選手，また片大腿切断で断端長が 3 分の 2 以下の選手です．
4.5	片大腿切断で断端長が 3 分の 2 以上の選手や，ごく軽度の下肢障害を持つ選手です．どんな状況であっても両側への体幹の側屈運動が可能です．

（日本車椅子バスケットボール連盟（n.d.a））

渡は著書の中で，この持ち点制は車椅子バスケットボールという競技において「障害」の「非障害化」を達成するのに貢献している，という．そして，この合計点の上限が定められた「持ち点」が各自に与えられていることで，どのような持ち点の選手をどのような配分で出場させるか，ということが，プレーにおける戦略として，意味を持ち始めるというのである．渡は，以下のような思考実験を行う．すなわち，プレーヤーの持ち点の組み合わせを考えてみるのである．以下，引用．

> コート内のプレーヤーの持ち点合計が 14.0 以内である場合，コート上の持ち点の組み合わせは様々となるが，現実的にはいくつかの組み合わせに限定することができる．まず，ゲームの中心となる 4.0，4.5 の選手は，たいていのチームで二人以上が出場している．クラス 4 の選手が二人以上出場し，かつ持ち点の合計が 14.0 になるような組み合わせの基本的なパターンは，「4.5+4.5+3.0+1.0+1.0」，「4.5+4.5+2.0+2.0+1.0」，「4.0+4.0+4.0+1.0+1.0」，「4.0+4.0+3.0+2.0+1.0」，「4.0+4.0+2.0+2.0+2.0」が考えられる．
>
> 実際にはハーフポイントの「0.5」があるため，組み合わせとしてはさらに多くなる．（渡, 2012：180）

クラス 4 の選手を含むとなると以上のような組み合わせが考えられる．しかし，実際に行われる試合，とくに大会で上位に残るチームのチーム編成を見ると，次のような編成になっている．以下も，渡からの引用である．

> 二〇一二年に行われた第四〇回日本車椅子バスケットボール選手権大会でベスト 8 に進出したチームのゲーム開始時の持ち点構成は次のようなものだった（決勝・準決勝・ベスト 8 の試合開始時）．
>
> ①4.5+4.0+3.0+1.5+1.0　②4.5+4.0+2.5+1.5+1.0　③4.0+3.5+3.0+2.0+1.0
> ④4.0+3.5+3.5+2.0+1.0　⑤4.0+4.0+2.0+2.0+1.5　⑥4.5+3.5+2.5+2.0+1.0
> ⑦4.5+3.5+3.0+2.0+1.0　⑧4.0+3.5+3.0+1.5+1.5
>
> （渡,2012：181）

なるほど，実際の選手権大会では，1.0 の選手が多く出場していることがわかる．メリハリのついた持ち点編成になっているのである．渡はこの事実を「持ち点合計が 14.0 以内ということは，4.5 の選手の代わりはそれより持ち点の低い選手であれば誰でも構わないが，持ち点の低い選手の代わりは，同じ持ち点の選手か，そうでなければ複数名交代して持ち点の制限をクリアしなければならないということである．」（渡,2012：181）と基本的な枠組みを説明したうえで，さらにクラス分けのルールの変遷に言及して，「4 点台のクラスができたこと，相対的に軽度な選手がいること，そして合計持ち

点の制限が 14.0 に拡大したことは，逆説的に 1.0 や 2.0 の相対的に重度な選手のチーム編成における重要性を高めているといえる.」（渡,2012：190）と解説し，1.0 や 1.5 のように，持ち点の小さい選手の有意味性（活用可能性の高さ）を説いている．渡の推論も説明も適切なものといえるだろう．ただし，もっとはっきりとおきていることを述べることも可能である．すなわち，実際のチームの得点分布を見るならば，「4.0+4.0+2.0+2.0+2.0」といった，平均点に近いプレーヤーを組み合わせることによるチーム編成はなされておらず，両極端の 4.5 から 1.0（または，1.5）を利用した，数学的にいうならば，分散の大きな持ち点分布でチームが編成されている場合が多い，という現象が起きているのである．

渡は理論的に可能な持ち点の組み合わせ全てに言及していないが，理論上では 3.0+3.0+3.0+3.0+2.0 といった持ち点の中間にいる選手で構成されたチームもあり得るはずある．しかし，実践では（3 点台，2 点台の選手のみで構成されるチームは例外だが）このような中間の持ち点を持つ選手で構成されたチームはあまり見られない．実践の場では持ち点 1 点台の選手を含んだチーム編成の方が戦略[1]として有効であるということが起きているのである. 車椅子バスケットボールのルールには 1 点台の選手を必ず入れなければならないという特別に配慮された規定はなく，またチームの持ち点合計 14.0 点以下で試合をするのは 1 点台の選手が入りやすいようにするために作られたわけでもない. それでも 1 点台の選手が入っている方が有利であると実戦で行われているのである．このように，理論的に考えただけではわからない現象が実際の現場で起きているということに面白みを感じ, 我々の論文においてもこのような視点を用いることが新たな気づきにつながると考えている．

3-2　車椅子バスケットボールの日本国内の環境について

女性の車椅子バスケットボール選手の生活面についての調査研究としては中道（2010，　2012）がある．これらの論文では日本選手だけでなく，海外の女性競技者をも対象に調査紙法調査が行われている．日本と海外を比較した時，トップ選手同士であっても，国によって選手を取り巻く環境は異なっており，日本の選手の環境はあまり恵まれていないことがわかる．2010 年の論文において，中道はアメリカ，オーストラリア，カナダ，日本のトップ選手に調査紙法調査をしている．その上で，選手の年齢や職業に注目し，さらに各国政府の取り組み・制度を照らし合わせて，それぞれの国の選手がおかれている環境を分析している．たとえば，オーストラリアについては，選手の年齢と身分の関係に注目して,「26.6（±6.92）歳[2]という年齢でありながら, 学生が 47.1% であったことは, 生活と競技とが両立できる環境がある程度保障されているものと推察された」（中道, 2010：59）と述べている．つまり，オーストラリアでは，競技生活を継続しやすいように車椅子バスケットボールの選手であることが学生や院生という身分を獲得するチャンスにおそらくつながっており，かつ，学生や院生という身分が奨学

金等の金銭的サポートや，比較的充実した練習環境と結びついているだろう，と予想しているのである．そのうえで，オーストラリアと日本を対比して，（1）大学という所属を持つことが「貨幣的援助」（中道, 2010：59）に結びつくだろうこと，そして，日本でも（2）「今日では多くの大学で建物と施設の物理的な配慮，情報機器の支援や設備の完備，修正された評価手続き，援助職員の配置など，これまで障がいのある人の就学の障壁となっていたものが取り除かれるようになってきた（総理府,1991)」（中道, 2010：59）ことを指摘しているところから，日本の選手の環境改善のための一つの方策として，大学を活用する路線を示唆している．

たとえば, カナダでも年齢が 29.7（±7.55）歳で学生割合は 42.4%, 有職者割合 45.5%である．アメリカでは 23.2（±4.96）歳で学生割合は 70%，有職者割合 26.7%である．これに対し，日本は年齢 28.7（±5.77）で，学生割合が 13.9%，有職者割合は 69.4%という構成であった．中道は，学生は「競技活動にかかる費用，生活費や学費などがなんらかの形で支援・援助されている」（中道, 2010：60）と理解しており，日本の女子車椅子バスケット競技者における学生比率の小ささを問題視しているのである．[3]

2012 年の論文では日本の競技環境についても言及しており,「一般の官・民に勤めながら，高い競技水準を維持していくことには相当な苦労があるものと推察される．我が国の障がい者スポーツを代表する車椅子バスケットボールのトップレベルにある選手においても活動に専念できる環境は十分に整っていない．言い換えれば，選手は勤務との両立が可能な限りにおいてのみ，活動を継続することができるといえよう」（中道, 2012：90）とまとめられている．

中道は上記のように, 車椅子バスケットボールの女性選手を取り巻く環境の実態について，国際的な比較研究を行った．これらの論文により国内の選手がおかれている環境が，海外と比較して良好ではないことがわかった．但し，調査対象が各国のトップレベルの選手のみであることには，留意しておくべきだろう．

しかし，選手には対策を取る力があるし，競技に必要とされる練習環境や技術のすべてが事前にしられている訳ではない．したがって，一般的には，良好でないと思われる練習・育成環境があったとしても，そのことで，チームや選手が自動的に弱くなるわけではない．つまり，一般的な練習環境を質問紙調査で調べるだけではなく，実際の練習と試合の状況そのものを調査していく必要があるのである．以下，そのような発想でおこなった，日本の女子車椅子バスケットボール競技者に対しての，練習場面への参与観察（球拾い程度の参与）とインタビュー調査の結果を報告していくこととしよう．

4. 調査結果

4-1 女性競技者バスケットボールチームの練習と試合の参与観察

研究を進める上で, 実際に女性競技者車椅子バスケットボールチームの練習と試合の参与観察を行った．チーム「XX」においては，選手は女性のみである．監督も女性で

あるが，コーチは 2 名とも男性であった．

この「XX」というチームでは週に 3 回練習をおこなっている．練習は女性競技者だけでなく，数名の男子選手も一緒に行っていた．ボールハンドリングとそれに伴った車椅子の操作練習，パス・シュート・ディフェンス・オフェンスの練習，ミニゲームといった流れで練習は進んでいた．練習日や練習開始時間は決まっているが，それぞれに仕事や学校などがあるため，自分の都合のつく日に通っているようだった．2〜3 時間ほどの練習時間が終わると，それぞれ車で帰宅していく．

女性競技者の大会は障害者・健常者の両方が参加できる大会と，障害者登録をした選手のみが参加できる大会がある．

現在，日本車椅子バスケットボール連盟に登録している女性競技者のチームは 8 チームであり，男子の登録数である 65 チームと比較するとかなり少ない．各地方に 1 チーム程度である．たとえば，我々が取材した女子チームのある近畿地方は，女性競技者チームが 1 チームのみであるのに対し，男子チームは 5 チーム存在する．

車椅子バスケットボールは男女に分かれてプレーをすることもあるが，一般のバスケットボールの場合と比較すると男女混合チームで実施される大会が多いように思われる．表 1 で日本車椅子バスケットボール連盟が開催している各大会での女性競技者の出場の可否について仕分けたものを示す．

表 2：大会を競技者の性別による大会出場の可否によって分類したもの

女性競技者のみ	男女混合	男子のみ	不明
・全日本女性競技者車椅子バスケットボール選手権大会 ・パラリンピック（女性競技者） ・国際親善女性競技者車椅子バスケットボール大阪大会	・全国障害者スポーツ大会 ・日本選抜車椅子バスケットボール選手権大会 ・車椅子バスケットボール秋季大会 ・西日本車椅子バスケットボール交流大会 ・DMS カップ東日本車椅子バスケットボール選手権大会 ・全国ジュニア選抜車椅子バスケットボール大会	・日本車椅子バスケットボール選手権大会 ・パラリンピック（男子） ・北九州チャンピオンズカップ国際車椅子バスケットボール大会	・全日本ブロック選抜車椅子バスケットボール選手権大会 ・全国シニア選抜車椅子バスケットボール大会

（日本車椅子バスケットボール連盟（n.d.a））

4-2 選手に対するインタビュー

女性競技者チーム XX の選手にインタビューを実施した．表 3 はインタビュー対象者 3 名の持ち点等である．インタビューの中では主に練習中の工夫や，男子選手とどのように競っているのかを尋ねた．また，男女のチーム所属の状況についても話を聞いた．

ここでは AA さんと BB さんから聞いた話を主に紹介していく．簡単に AA さんと BB さんの紹介をすると，まず AA さんは 10 代で車椅子バスケットボール歴は約 5 年である．チーム内では若手ととらえられている．持ち点は 2.5 点でミドルポインターと位置付けられている．BB さんは 20 代で車椅子バスケットボール歴は約 9 年である．BB さんが言うには，チーム内では若手とのことである．持ち点は 1.0 点でローポインターに位置付けられる．BB さんはチーム XX 以外にも地元 YYYY 市の男子車椅子バスケットボールチームにも参加している．AA さんと BB さんは女性競技者の日本代表候補選手であり，海外の女性競技者選手との試合経験もある．

チーム XX は週 3 日の練習を行っている．BB さんは YYYY 市のチームの練習にも参加すると週 5 日練習に参加していることがある．

CC さんは，持ち点は大きく，障害の程度は重くない．ただ，比較的年齢が高く，家事負担等から，競技生活から引退することも検討しているが，チームメンバーが少ないため，なかなか辞める決心がつかないとのことだった．

表 3・インタビューを実施した女性車椅子バスケットボール選手 3 名の一覧

	インタビュー実施日	対象	持ち点	場所	備考欄
1	2016 年 7 月 2 日 14:00～15:00	AA	2.5	京都府京都市障害者教養文化・体育会館	インタビュー時，AA の母親とチームメイト GG が同席した．
2	2016 年 7 月 2 日 15:00～16:00	BB	1.0	京都府京都市障害者教養文化・体育会館	
3	2016 年 7 月 2 日 16:00～17:00	CC	4.5	京都府京都市障害者教養文化・体育会館	

※いずれもインタビュアーは藤野久美子

写真 1　男子選手をディフェンスし，パスを遅らせている女性選手（右から 2 人目，白 14 番）, 2016 年 6 月 5 日，第 16 回全国障害者スポーツ大会　車椅子バスケットボール競技　近畿ブロック予選大会

写真 2　女性競技者選手（青 17 番）が男子選手（白 15 番）をマークのため接近，接触している．
2016 年 6 月 5 日，第 16 回全国障害者スポーツ大会　車椅子バスケットボール競技　近畿ブロック予選大会

写真３　逆手操作で前進する練習

写真４　手前の二人（黒のＴシャツ，左から１人目と３人目）に抜かれないように，マークを確認しながらディフェンスする練習

写真 5　右から 2 人目の選手がパスしたボールをシュートする女性選手（左端）

インタビューや練習見学で感じたのは，女性競技者は少ないが，活気があるということである．以下のインタビューから，なぜこんなにも活気があるのか，男子チームとの関わりを見ながら考えてみたい．

下記のインタビュー1-1 は AA さんのインタビューで，男子チームに女性競技者が参加していることについての話を聞いた時のことである．

＜インタビュー1－1＞［インタビュー対象者 A に 1，B に 2，C に 3 を割り当てた］

69XXXX：ほ：；．男子チームにも女性入れるんですか？

70AAAA：入ろうと思えば入れ：：ますね．女性競技者のチームに男子が入るっていうのは聞かないんですけど，

71XXXX：ふん：：：，

72AAAA：なんかでもたぶん，ちゃんとした登録じゃないかもですけど，

73XXXX：はい

74AAAA：混じって試合に出ることは，なんかどっかのチームとか，結構，聞きはします．

75XXXX：あぁ，そうなんですか．

76AAAA：関西は少ないん，てか，たぶん無いんですけど．

77XXXX：ふんふんふん

78AAAA：たとえば，鳥取の方とか．

79XXXX：はい

80AAAA：あとは：：，どこだっけ：福井，とか．そっち系の方とかは，ちょこち

ょこ，試合にこう，遠征に A［チーム名］で行ったときになんか，あ，二人ぐらいいはる女のひと．みたいなことは，たまにあります．

81XXXX：あぁ，そうなんですね．え，知らなかった…．

82AAAA：ふふふ．結構みます．

83XXXX：なるほど：

84AAAA：女性競技者チームが少ないんで．

85XXXX：そうですよね．

AA さんが言うように，女性競技者チームは少ない．日本車椅子バスケットボール連盟の「女性競技者選手募集」Web ページに掲載している女性競技者チームは，東北に 1 チーム，関東に 3 チーム，中部に 1 チーム，関西に 1 チーム，中国・四国に 1 チーム，九州に 1 チームの 8 チームであり，北海道は男子チームの中に女性競技者が所属して練習をしているとのことである．インタビューにもある通り，男子に交じり女性競技者が練習しているところはあるが，各地方に女性競技者チームは 1 チーム有るかないかの状態であり，この体制は，車椅子バスケットボールに女性競技者がアクセスしやすいとは言えない状態であるといえよう．

しかし，女性競技者が少ないということは，それだけ日本代表になりやすいということでもある．私が今回実施したインタビューでも 3 名の対象者の内 2 名は日本代表候補選手であった．いわゆる普通の女性競技者チームの選手に話を聞きに行ったのだが，すぐに日本代表選手や代表候補選手に会えてしまうのである．さらに，練習環境上のメリットもある．すなわち，女性競技者チームが少ないことで男子チームに混ざって練習すると，日本代表選手候補となった競技者にとってはそのことがメリットとなる可能性があるのである．なぜなら，男子選手との練習や試合は，外国人選手との仮想練習・仮想試合という意味を持ち得るのである．実際に，国際試合をする機会のある女性競技者選手に男性選手と一緒に試合をしたときのことを聞くと，いずれの選手も男子選手を海外の女性競技者選手に見立てて練習していたことがわかった．次のインタビュー1–2 を見てみよう．

＜インタビュー1－2＞

241XXXX：（前略）A さんって，男性の方とも試合します？

242AAAA：します．はい．

243XXXX：え，じゃ　あ今の教えてもらった技術[4]なんですけど，男性とやっているときにも，なんか，あ，いけるみたいな，できそうみたいな感じはありますか？

244AAAA：あ，ありますあります．

245XXXX：結構，体おっきい人というか，

246AAAA：そうですね：，それはそうですね.

247XXXX：でも大丈夫なんですか？なんか，ふっとばされたりしません？

248AAAA：あの：，★1）男子チームよりも，あの：，外国のチームの人達の方が吹き飛ばされます.

249XXXX：あ，女の，女性の

250AAAA：ドイツの人とか，選手の方たちとか．日本が飛ばされます．なんか飛ぶっていうか，腰を（　　）なります.

251XXXX：へ？腰?

252AAAA：なんかガーンってきて，あっ，てなります．はははは.

（中略）

382XXXX：いや本当すみません.・・・なんていうかあれですね．あの，私てっきりこう，男の人と女の人の比較をまあしようっていうふうにいろいろ考えながら来てたんですけど，なんか，男の日本人よりも海外の女性の方が強いんだなっていうのが，ちょっと今回の発見で．なんか，でも対戦するのはそういう方々が多いってことなんですかね？

383AAAA：★2）男子の試合，最初は，なんじゃこりゃと思ったんですけど，でも，なんやろ，慣れではないですけど，外人の方たちと戦うことの方が少ないんで，その分，いつもより，いつもは感じひん刺激を感じるのかもしれないですけど，それが理由なんかもしれないですけど，でも断然，断然でもない・・えーと，★3）男性の選手よりも外人の女性の選手のほうがおっきいっていうのは

384XXXX：あ：そうなんですか.

385AAAA：全員が全員じゃあないんですけど，あの選手よりあの選手のほうが大きいなみたいなのはあります.

386XXXX：へ：.

387AAAA：全然．なんかずっしりしたあれが，悪い意味じゃなくて．こう，絶対に力じゃ，・・なんていうんやろ・・★4）男子の方たちってこう，私たちが引っ掛けてコケる方もいるんですけど，その外人の方たちやったら，私がこう止めて相手こけそうな時でも私がコケるんですよ.

388XXXX：あ，そうなんですか．引っ掛けに行ったのに

我々の「男の日本人よりも海外の女性の方が強い」という発言について AA さんは，男子の試合について「最初は，なんじゃこりゃと思った」と発言しているが，今は外国人選手の方を脅威に感じているようである．これらについては，日本の男子選手に対す

る慣れがある可能性や，日本男子選手よりも海外女性競技者の方が高い技術を持っている可能性からの影響を考えることができる（但し，前者については，AA さん自身はこのことを男子選手に対する「慣れではない」と発言している）．

次のインタビュー2–2 はＢＢさんに対するものである．我々の，全国障害者スポーツ大会の車椅子バスケットボールの近畿ブロック予選大会（男女混合チーム．表１参照）の見学を受けての会話である．やはり海外の女性競技者との試合を考えて練習していることがうかがえて興味深い（上掲の，男女混合プレーにおける女子競技者のコンタクトプレーの様子を捉えた写真１，写真２も参照）．

＜インタビュー2－2＞

119XXXX：結構男性チームと，の中で試合しているときって，私のイメージだとなんかもう，すごいこう，なんだろうな，力があるから，いろいろと勢いに押されて，うまくできないんじゃないかっていうのがあるんですけど．

120BBBB：あ：，

121XXXX：なんか，そういう時の工夫とかあります？

122BBBB：・・工夫というか，なんか，たぶんその気持ちの面・・．ま，工夫・・は，まぁその，基本，男子が来るからっていって，下がろうと思わないので，なんやろ，なるべくこのスポーツ．コンタクト，コンタクトって接触って意味なんですけど，そうすればやっぱりスピードが落ちるじゃないですか．だからディフェンスもしやすくなるんですよね．

123XXXX：あぁ，当たりに行けば，

124BBBB：そう，当たりに，多少なりともコツンって当たれば，相手のスピードは緩まるので，やっぱり自分よりも早い選手だったり，ちゅ：とあの軽い選手・・障害の軽い選手には，ディフェンスつくときは，女性競技者相手でももちろんそうやるんですけど，対女性競技者でも．やっぱり男子であればもっとそれが，極端に差が出てくるので，そうなったとしても，やっぱり，★5）試合に出してもらってるからには，やっぱりきっちりやらないとな：，っていうのは，対男子のほうが余計に思うので．やっぱり★6）外人を想定した時に，っていうのは男子とやるときはすごく意識はするので，やっぱり外国の選手とやるときにも，もちろんぶつかっていくので，まそれとおんなじ感覚として，あの，やりますね．

125XXXX：ほ：，なるほど．

126BBBB：気持ちの面では，まぁあの，失敗してもカバーしてくれるやろ，と思ってるので，ははははは．

ここで注目したいのは★6)「外人を想定した時に，っていうのは男子とやるときはすごく意識はする」という発言部分である．この発言から読み取れるのは，女性競技者にとって，全国障害者スポーツ大会のような，男女混合の大会で男子選手を含んだ相手チームと対戦することは，外国人選手との対戦の仮想試合という意味を持つということである．この事象については，競技者人口の少ない女性競技者がかならずしも，練習環境面において，自動的に不利になる，とは限らないという「思わざる効果」的な形での解釈を可能にする事態であると理解することもできよう．つまり，国内トップクラスの女性選手についていえば，競技人口が多い男性のトップクラスの選手よりも，体格のよい外国人選手に対しての対策を進めやすい環境がある，ともいえる，ということが起きているように見えるのである．

近年，障害者スポーツは障害者のレクリエーションや健康維持という福祉的な目的に基づいて意味付けられるよりも，純粋な競技として意味付けられることが多くなってきている．その中で障害者スポーツをする選手にとって，ひとつの目標となるのはパラリンピックへの出場[5]とそこでの勝利であるといえよう．そのように考えると，ナショナルチームに手が届く女性競技者にとって，「外国チームに対して対策が取れている」という評価を得ることは，日本のナショナルチームに入ってパラリンピックに出場するためにも有効だし，パラリンピックに出て勝つためにも有意味なことだと思われる．日本国内の車椅子バスケットボール選手の環境を考えた場合，女性競技者と男性競技者の比較という視点から見て，男子選手は同一のレベルの選手との練習しかできないのに対し，女性競技者は同一レベルの相手に加えて，自分たちよりも体格的に上位のレベルの選手（つまり男子選手）との練習や練習が容易にできるという点で有利と言えるのではないだろうか．

女性競技者のこのような状況はほかの競技でも見られる．健常者の例だが，女性競技者のサッカー日本代表も練習試合で男子の各年代の代表チームと練習したり，バレーボールでも同様の練習方法がみられるという．以上のように女性競技者選手が男子選手を海外の選手と対戦するための試金石として利用する関係はよく見られるものであると思われる．

ただし車椅子バスケットボールと上記の健常者の競技を比べた時，後者は男子選手だけでなく，それなりに女性競技者選手も多くなってきており，女性競技者チームだけでも試合ができる環境があってのことだが，車椅子バスケットボールにおいては，女性競技者チームだけの練習が，競技人口が少なくて困難であるということには留意するべきだろう．

次のインタビューにおいては，女性競技者が男子選手との練習をすることの意義をもう少し詳しく考得ていきたい．インタビュー2–3，2–4 を合わせてみていく．

＜インタビュー2－3＞

128BBBB：まぁまぁ，あの：，さすがにそのね，代表とかよりももちろん，なんやろ，慎重・・慎重にやってないわけではないですけど，まぁ，その，なんですか，すごい選手が兵庫県［は］いっぱいいるので，国体でやるときには色々試そうと思って．まぁ，こうやってすれば自分は抜かれるんだなとか，こうやって止めれるんやな：っていうのを，やっぱ客観的にというか，見れる余裕もあるので，カバ：してくれるだろうと思ってるので．なので，そうですね，★7）いろいろと対男子のなかでやるときのほうが，いろいろ，あ，これやってみよ．あれやってみよ．という気持ちの余裕はすごいあります．

129XXXX：もうじゃぁ，その，ま，男子・・・あ，それって男子がその，だと安心，ある意味安心していろいろ試せるっていう感じ？ですかね．

130BBBB：ま，そうで・・ん：，とかまぁ，普段 XX ［所属チーム名．選手は女子のみ］以外にその，YYYY（地域名）まで練習に行ってるので，なんか，そう，男子と練習するのは結構日常的なので，なんで結構，なんですかね，やっぱチームとかになると★8）自分の役割とかもあるので，それを意識しないとだめなんですけど，やっぱ男性のチームは，あの，自分・・なんすかね・・★9）これをしてっていう役割ってないじゃないですか．

131XXXX：あ：，チ：ムというか一緒に練習してるから

132BBBB：一緒に練習してもらって，させてもらってるところなので．もちろんオ：ダ：があれば，たとえばその男子のチームの，たとえば大事な試合が近ければ，まぁ，相手を想定してやったりとかはするので，そん時はもちろんそのオーダー通りにやるんですけど，そうじゃなくてもフリーランスの時とかは，やっぱり自分のやりたいこと？だったりとか，★10）やっぱり男子のディフェンスでも通用するなら，ま対女子になっても通用するだろうって．まぁ，自分の中での理解の仕方じゃないですけど，があるので，やっぱり男子のチ：ムで，やっぱり自分もなんか，ハイポインタ：を生かすプレイだったりとか，自分がシュ：ト打つような動きだったりとかっていうのは，ま，よく試したりとか．それこそさっきのじゃないですけど，パスもワンハンドで出すようにしてますし．はい．

＜インタビュー2－4＞

267XXXX：あ，ありがとうございます．助かります．・・そうですね．あとは，結構 BB さんがなんか男性の方と練習してるのを聞いたので，すごい，思ったよりも，あんまり男だからっていうのを意識してなさそうだな，とは

268BBBB：あ，それは思わないですね．はい．

269XXXX：あ，あと海外の選手とも結構やりあうんですか？

270BBBB：や，あ，一応日本代表としては，活動させてもらってるんで．ま，今は日本代表候補ですけど．

271XXXX：ほ：

272BBBB：なのでやっぱり外人選手を想定してってやると，やっぱり国内の選手とやるよりかはやっぱ，★11）パワ：のある男子，スピ：ドもある男子の選手と，のほうがより外国の選手に近いタイプでできるので，ていう意味で男子の試合，練習にはいくようにしていますね．やっぱもちろん最初はあったんですけど，あの：

273XXXX：抵抗・・

274BBBB：抵抗っていうか，もちろんそれはあったんですけど，まぁ，それも，まあ慣れてくるので．やし，あの，今はずっと YYYY に行かしてもらってるんですけど，やっぱ YYYY の選手も始めるきっかけになったのも YYYY なので，そういうのも知ってくれてるので．やっぱりすごくよくしてもらってるので，もう今は全然一人でも行きやすく．はい．なってるので．

275XXXX：あの，海外の選手と戦うのって日本代表以外だとあんま機会ってないんですか？

276BBBB：ないですね．いま DD と LL[6]は行っているので，やっぱり外国の選手と戦う機会は自分たちで作ってるって感じですね．

ここでは★8）「自分の役割」★9）「役割」と★10）の「やっぱり男子のディフェンスでも通用するなら，ま対女子になっても通用するだろうって」という３つの発言に注目したい．

★8）で BB さんが言及している「自分の役割」とは，女子選手のみで構成されたチーム XX が，女子チームと対戦するような場合における BB さんの役割であると思われる．これに対し，男子チームのメンバーに混じって練習しているような場合において，

BB さんに与えられる役割の候補としては，以下の３つが論理的には考えられるだろう．

①チーム XX（女子のみチーム）内で BB さんに与えられている役割

②練習に参加した男子チームが別の男子チームと闘う準備の中での役割

③フリーランス（BB 氏には，男子チームからは役割への特段の期待がない）

インタビューからは YYYY という地域の男子チームの練習に参加した場合には，①の期待がされることはないことがわかる．②の期待がされる場合はあるが，主として，BB さんがおかれている環境は③「フリーランス」である．本来的には，女子のみチームである XX に所属している BB さんにとっては，①の期待を受けた練習環境が YYYY 地域の男子チームで練習をしている場合に入手できないことは，一見不利な環境であるようにみえる．しかし，BB さん個人にとっての技術向上の観点からみたとき，あるいは，日本代表候補選手としての BB さんにとって，ナショナルチーム内での自らの存在価値を上げようと考えたときには，②や③のポジションにあることは，むしろ，有意義であるとも言えるのではないだろうか．

「いろいろ試す」ことができる環境のなかで，技術が向上した BB さんは，チーム XX 内での役割をよりよく果たすことができるようになっていくのではないだろうか．上述の展開予想が成り立つのなら，日本国内に女性競技者が少ないということは，翻って男子チームに参加する環境があるということをも意味しており，そのことには，マイナスだけでない，プラス的な意味があるとも言えるだろう．

日本代表レベルの女性選手が，日本代表レベルの男子選手と比べて，高度な体力や技術力をもった仲間や相手と練習をする機会に恵まれているというのは★11）の発言からも推察することができる．

とはいえ，個人のレベルが向上するというメリットはあるにしろ，男子チームの中にいては，女子チームと対戦する場合に洗練が必要となるチームプレー的戦術練習については，十分にはできないというデメリットはあるだろうと思われ，その部分は，個人技能の向上のメリットから差し引いておく必要があるだろう．

ここまでは女性競技者選手が掴んだ利点について述べてきた．しかし，競技人口が少ないということにかかわる「思わざる効果」は，利点をうむ方向にばかり働くわけではない．以下では，競技人口が少ない女性競技者選手において生じる「思わざる効果」ではあるものの，産み出されるものが利点とは言えないものについて考察していこう．

BB さんとのインタビューでは男子チームに所属することについて最初は「抵抗」（＜インタビュー2－4＞）があったようである．もちろん，チームで過ごしていくことで，「慣れ」ていくが，女性競技者がいないチームというものは，女子がそのチームの練習に参加する時点で，一つの障壁になるのではないだろうか．また，＜インタビュー2－1＞を見ると，BB さんが練習に参加している男子チームにはもう一人女性選手がいるが，

現在は妊娠・出産のために活動していないことがわかる．BB さんはその女性競技者が妊娠のために休部するときには，自分がこのままチームに残っていくべきかどうか悩んだという．これらの意味的連関は，予想できる展開ともいえるかもしれないが，思わざる効果，ともいえるのではないだろうか．そして，かなり女子選手の技能向上にとってマイナスの効果をもつ思わざる効果といえるのではないだろうか．

＜インタビュー2－1＞

112BBBB：そうなんです．選手はもう一人いたんですけど，いま妊娠されて．もう出産されるので．そっちのほうでいまは選手ではないんですけど．

113XXXX：なるほど：．へ：．や，私，あの男性の中でひとりですげ：って

114BBBB：いや：，でも最初はほんとに悩みましたよ．去年まではその女の方がいたので．その私元々，あんまり，ってか人見知りなところがあるので．

115XXXX：あ，そうなんですか

116BBBB：そうなんです．とくに男の人とかだとちょっとなんか，人見知りを発動してしまうので，そのう，もう，妊活[7]をするっていうのは去年の国体[8 9]，本戦行ったときにはわかってたので，あ：来年どうしよっかな：，ていう風にはずっと考えてて，まあ，でもその人は，なんか，来年　だからそのえっと，来年が愛媛国体なんですよね．愛媛にはもどれるように頑張る，みたいなことをおっしゃてたので，あ，それやったらガンバろっかな：っていう風には思って．周りの人からも，やりぃよぉ：，みたいなことを言ってもらったので．ま，そうやって言ってもらえてるなら，いいのかなあみたいな．

このように，女性には結婚や妊娠のようなライフイベントによってチームを離脱する選手が比較的多くいるので，そのことに伴う困難がありうるのである．また，CC さんからは，上述のものとは別の悩み，すなわち，ある程度の年齢を重ねた女性の悩みを聞くことができた．

＜インタビュー3-1＞

326CCCC：あんね体力的にしんどいのもそれが一番おっきいんですけど，やっぱりいままで仕事持ってると，やっぱ仕事もそれなりにやらないかんくなってきて，やっぱり，その：ね，比重，練習するそのなんだ生活のスタイルが，どこを比重に置くかって変わってくるんですよね．バスケか，ゆったら仕事かで，どうしても仕事とりますよね．やっぱり．

327XXXX：ん：．

328CCCC：上目指してるわけでもないし，やっぱそうなるとね，やっぱり練習行く回数もいままでより少なくなったりとか，するし．
329XXXX：なるほど．あそっか，年齢的に責任が増えてきて，仕事の方がって．で，えっと：，バスケでも，あ，上を目指すっていうのは
330CCCC：あ，代表とか
331XXXX：あ，なるほど．
332CCCC：じゃないし，そうなるともう趣味の領域じゃないですか．クラブチームとはいえ．
333XXXX：はい
334CCCC：あの，世間一般に見たらですね．
335XXXX：そっか，プロじゃないから収入も特にないですよね．
336CCCC：うん．
337XXXX：・・・・なるほどなあ．

（中略）

343XXXX：そっか：．そうするとやっぱり，なんというか．そういう風に仕事を取ってってしまう女性の選手って言うのは多くなってきてるんですかね？年齢とともに
344CCCC：そうですね，いま，全体的にも年齢上がってるので．どこのチームも．やっぱりそう，私は仕事ですけど，やっぱそれじゃない部分もあるでしょうね．家庭であったりとか．

ここでは年齢や仕事の悩みについておもに語られたが，我々が興味を持ったのは，「上目指してるわけでもない」，つまり代表選手を目指していない立場になったとき，女性競技者はチームからの離脱を考えるのかもしれないということである．上記にある通り，日常生活で仕事や家庭に重きを置く場合，選手をやめることもあると考えられる．ただ，C さんの場合，この後のインタビューで次のように話をしている．

＜インタビュー3-2＞
367XXXX：いや，本当に人手不足だと思って．
368CCCC：いや，本当は選手やめるべきなんですけど，やっぱ，やめちゃうとチーム・・私がいて何がなるってわけじゃないですけど，やっぱり試合が組めない，くなったりするから．
369XXXX：あ，そっか選手の
370CCCC：あるから，やっぱ，そこはね．そこはぼちぼちでもやっぱり乗りな

がら．う：ん．

371XXXX：なるほどな．

372CCCC：女子がそういうところがあるんですよね．だから男子はね，それこそ家庭もとうが何しようが，ま，嫁が怒らへん限りね，練習できるけど・・女性競技者はそういうわけにはなかなかいかないでしょうね．だからすごい人口少ないからみんなそこ，調整，家との調整しながらとか，ていうので，なんとかどこのチームも持ってるとか．

女性競技者が少ないために，チーム数が少ないだけでなく，そもそも女子チームの場合，メンバーの人数がいないために試合ができないという状況がおきていることもあるようだ．男子選手の場合，男子の競技人口が多いため，誰かがチームをやめたとしても，そうそうチームとして試合が組めなくなるといった事態は起こらないだろう．また，CC さんからの印象ではあるが，男子選手と比べると，女性競技者は家庭や仕事と競技を両立させて生活することが難しいという状況になりやすいようである．

これまで，AA さんと BB さんのインタビューからは女性競技者，とくに日本代表候補になるような女子選手にとっての練習環境の意義を見てきた．そこでは男子チームに少数女子として加わった上での練習では，男子選手と混じって練習をすることが，仮想外国人選手との練習という意味合いになって，それなりの技術を磨けるという利点が，一種の「思わざる効果」として存在しているということを発見した．

しかし一方で，女子の競技者が少ないがゆえに，なかなか女子チームとしての戦術練習はできないという難点があることもわかった．さらに，根本的には女性競技者の競技人口が少ないために女性競技者チームを存続させること自身が困難になっている事実もわかった．代表に関係なく活動している女性競技者選手にとっては，男子との練習にあまり利点はなく，就労先や家庭の状況によっては，競技生活が重荷になるというジェンダー的要素もあるようであった．けれども，自らはナショナルチームに加入する可能性がなくても，当該の女子メンバーがやめたときには，女子チーム自体が試合に出られなくなって，ナショナルチーム関係者も困る可能性が高くなる，という状況が発生していた．そのように考えると，競技人口が少ないことで，ナショナルチームに関係していないメンバーの辞め難さが増していく，という「思わざる効果」も想定できるように思われた．当該女子メンバーにとって，チームに在籍し続けることがチームを存続させ，ひいてはナショナルチームへの貢献にもなる，という因果が想定しうるのである．

5. おわりに

この研究では，車椅子バスケットボールを行っている女性競技者の競技生活調査から，直接的なジェンダー性（男性との違い）を見出すことができるかを初発の問題意識として考察を進めてきた．結果としては，様々な面で，男子競技者とはことなる女子競技者

の特徴が，発見されたが，それらは，直接に選手が女性であるということに由来するものではなく，競技ルールや競技の戦略やチームの編成のされ方などの中間的要因を媒介しての達成であった．たとえば，今回の調査の結果，女子選手が男子選手といっしょに練習や試合をすることがノーマルであることが発見されたが，それは，一般的な個人的な技術向上だけでなく，国際大会で，海外の女性競技者と闘う力のアップに結びついているようだった．これは，補償的な対応が戦略的な効果を産んでいるという風にかんがえれば，「思わざる効果」的な，実践状況の特異性に由来するジェンダー的特徴であるといえよう．

一方で，女性競技者が競技を続けるのに際し，本人の就労先や家庭の状況が障害となるメカニズムには，さらに，競技人口が少ないが為に，自宅や職場の近隣に女子チームが存在しにくく，遠距離の移動を強いられるがゆえに，男子競技者よりも，さらに競技生活の継続に伴う負担が大きくなり易いという形で，ジェンダー的な増幅効果があるようだった．けれども，この部分にも，環境から直接に由来するものをこえた，状況依存的な特異性があるようだった．ただでさえ，男子選手よりも，アスリートとして，自らの生活を自立的に編成する権利を制限されがちであるという女子選手固有の事情が，チームの空間的配置密度の小ささで増幅されているようだった．

また，評価をどのようにしてよいかは，難しいが，競技人口が少ないがために，試合が実施できるだけの人数を集めるのが，ギリギリになっている女子チームがあり，結果として，自分の所属チームが他のチームと試合ができるようにするために，言い換えればチームを生かし続けるために，あまり競技力の向上に積極的でない形であっても，在籍し続けることで貢献する，という女子選手のあり方も発見された．ここには，競争環境が弱いことが，競技力の弱い競技者にとって存在価値の基盤を提供する原因になっている，という一種の逆説が見て取れる．女子車椅子バスケットボールにおいては，競技人口が少ないことが，競技力のある競技者には，日本代表になり易いという形で競技継続要因になる一方で，競技力のあまりない競技者には，生きがい提供がなされやすいという形で競技継続要因になるのである．同一要因が違ったメカニズムで競技者数維持に働く興味深いメカニズムが発見されたといえよう．

もうひとつ興味深いのは，車イスバスケットボールにおけるある種たまたまの実践的特徴が，女子車椅子バスケットボール選手の競技生活のありように影響を与えているように見えることである．渡（2012）の発見をベースに我々の見立てを記述してみると，以下のようになる．渡（2012）の議論が示しているのは，車椅子バスケットボールは「個人の持ち点をチーム全体で合算した合計点を 14 点以下としたキャップ制」を採用しているが，そのことから直接帰結する水準以上に，実際のチーム編成では，ローポインターが重要視されている，ということであった．つまり，上述の「合計点 14 点以下ルール」からでは，直接には「ローポインターの活用が戦略の鍵だ」ということにはならないのだが，その「合計点ルール」に，「車椅子」の材質や，中長距離シュートの成

功率の状況のような具体的な諸条件がいろいろと組み合わさることによって，「チーム編成においてローポインターの活用が重要である」という性質が生じるのである．我々が注目するのは，そのようにローポインターの活用が重要視されている実際の車イスバスケットボールの環境こそが，現在の女子選手が利用可能な環境となっているのだろう，という点である．すなわち，車椅子の幅を活用したディフェンスがかなり有効であることが，筋力の若干劣る女子車イスバスケット競技者に，チーム内でのポジションを用意している側面があるのだろう，という見立てをしているのである（傍証は，注１の後半に写真付きで提示した）．

この推論を段階的に提示するなら，以下の形になる．

すなわち，現在の車イスバスケットボールの戦略では，チームメンバーに多様性を持たせる方が有利であると実践的に理解されているとまず言える．すなわち，渡（2012）によれば，中間的な障害の選手だけで 5 人を揃えるよりも，重度の障害の選手と軽度の障害の選手をバランス良くチームに配置した方が有利であることが知られ，多くのチームがそのようにチーム編成をしている．ところで，そのような「戦略的常識」があると，女子選手を受入れ易いのではないだろうか．「写真１」や「写真２」でみることができるように，実際に，女子選手が，ハイポインター（障害の軽い選手）の男子選手の速攻を阻止する防御役をやっているシーンがたくさん観察されたが，その役割こそは，ローポインター（障害の重い選手）の役割として渡（2012）が記述していたものと同じなのである．もうすこし，仮構的なことをいうのなら，このように，女子選手に十分な戦略的役割の提供が可能であるからこそ，車椅子バスケットボールにおいて「男女混合チーム」による大会が当たり前に存在しているのだ，ともいえよう．

議論をまとめよう．車椅子バスケットボールにおいて，選手が女性であることは，競技ルール上は，特に意味を持たされていない．[10] このように，ルールや環境は，直接には女性であることを特別扱いしていないのであるが，競技人口密度やチームの戦略などの「実践」を経由することで，さまざまな「ジェンダー的特性」が，車椅子バスケットボールには生じて来ているのである．たとえばここから，この世のさまざまな組織や活動の特徴は，それがいっけん年齢や階級や性別等の属性に還元可能であるようにみえたとしても，直接の還元可能性がない場合があること．組織や活動の特徴と属性を結び付けるメカニズム中には，間接的なものや，予想を裏切る「思わざる効果」的なものがあること，これらのことが言えるかもしれないように思われた．研究の継続を期したい．

謝辞

本稿の執筆にあたっては，順天堂大学スポーツ健康科学部の渡正先生から貴重なご助言・ご指導をいただきました．また，チームの取材につきましては近畿車椅子バスケットボール連盟の河石功様から多大なご配慮をいただきました．心より感謝申し上げます．

[1] ここでいう戦略とは，1 点台の選手など，持ち点の低い選手をチーム編成に含んでいた方が，4 点台の選手など持ち点の高い選手をより多くチームにいれることもでき，攻守において有利にゲームを進められると理解されているということである．この理解の背景になっているのは，持ち点の低い選手であっても，防御において，持ち点の高い選手を足止め力があり，その持ち点分以上の働きが可能であるという理解があるということである．実際に我々が見学した試合でも，1 点台の選手が 4 点台の選手とマッチアップする場面が見られた．1 点台の選手がディフェンスのとき，相手の 4 点台の選手とゴール下でマッチアップした際にはほぼ負けてしまい，シュートをいれられていた．しかし 1 点台の選手のチームのディフェンスが終わり，攻守が切り替わった直後，4 点台の選手を自陣に留めるように進行を妨害することはできていた．このときは 1 点台の選手一人ではなく，仲間の 4 点台の選手とともに妨害していたが，相手の 4 点台の選手より先に仲間の 4 点台の選手がオフェンスに向かうことはできていた．この結果，相手のディフェンスで有利な 4 点台の選手を 1 点台の選手で留めたため，自チームは持ち点の高い選手で敵陣にオフェンスを仕掛けられるようになっていた．（渡（2012）も，上記とは攻守が逆だが，このように持ち点の低い選手が高い選手を止めるプレーを紹介している．）このような，多様性（ダイバーシティ）活用型の戦略が標準的になっていることが，本文 4 章以降で言及する男女混合チームにおける戦略構想を容易にし，その容易さが，女性車イスバスケット競技者が，男子チームに入って練習することの容易さに繋がっている，という連関があるのではないだろうか．以下の「写真 6」と「写真 7」は，この注 1 の解説用に掲載したものである．

写真 6
ローポインターである白 7 番（白 8 番の奥の選手）が，ハイポインターである青 4 番の選手を足止めしている場面である（白チームは左方向に攻めている）

写真 7

「写真 6」の直後．青 4 番が遅れてディフェンスに向かう．この後白 7 番が追いつけないので白 8 番が青 4 番の前に入って進行を止めてからオフェンスに向かった. その間に白 7 番はオフェンスへ向かった.

[2] かっこ内の数字は標準偏差を示している.

[3] ただし，中道は，有職者よりも，学生の方が有利な理由については，「推察された」（中道, 2010：59），や「なんらかの形で」（中道, 2010：60）というような形容の仕方で表現しており，詳細な分析は行っていない.

[4] クロスやスタックと呼ばれるディフェンスの技術のこと.

[5] 車椅子バスケットボールでも，海外選手との試合は国内でも開催されており，女性競技者の日本代表が戦う舞台としては国際親善女性競技者車椅子バスケットボール大阪大会があげられる.

[6] DD と LL は人名であり，日本代表選手である．DD はオーストラリアに留学し，現地のチームで活動していた時期がある.

[7] goo 辞書によると「妊活」は「《「妊娠活動」の略》妊娠についての知識を身につけ，体調管理を心がけたり，出産を考慮に入れた人生設計を考えたりすること（出典：デジタル大辞典)」であるがここでは妊娠後の活動のことを指しているようだ.

[8] ここでは，全国障害者スポーツ大会のことをさして「国体」と言っている．全国障害者スポーツ大会は毎年，夏の国体の直後の日程で同じ開催地で開かれているからか.

[9] 全国障害者スポーツ大会の車椅子バスケットボールは男女混合でチームを構成しても可とある (試合中常に女性競技者を出場させておかなければならないという規定もあるが詳細は不明)．なお，女性競技者を入れたことによる持ち点のハンディはない.

[10] じつは，関東車椅子バスケットボール連盟が開催している「High8 選手権大会」（ローポインターの技術力向上を目的に，チーム合計点を 14 点以下ではなく，８点以下に設定した大会）では，女子選手は，女性であることを理由に，自分の持ち点から 0.5 点を引くことが認められている．したがって，この「High8 選手権大会」では，女性であることが，有意味化されている（http://www.nhk.or.jp/parasports-blog/100/278601.html）.

文献

goo 辞書,n.d.,「妊活」, http://dictionary.goo.ne.jp/jn/258761/meaning/m0u/, 2016 年 11 月 18 日閲覧, エヌ・ティ・ティレゾナント.

中道莉央, 2010,「障がいのあるアスリートのプロフィールに関する一考察―国内外の女性車椅子バスケットボール選手を対象に―」, The Asian journal of disable sociology,10:55-66,（アジア障害者社会学会発行）.

中道莉央, 2012,「女性車椅子バスケットボール選手のスポーツライフの一考察―IWBF アジア・オセアニアゾーンに着目して―」, The Asian journal of disable sociology, 12:85-96,（アジア障害者社会学会発行）.

日本車椅子バスケットボール連盟, n.d.a,「車椅子バスケットボールのルール」, http://www.jwbf.gr.jp/rule/ , 2017 年 2 月 27 日閲覧, 日本車椅子バスケットボール連盟.

日本車椅子バスケットボール連盟 n.d.b,「大会情報」, http://www.jwbf.gr.jp/games/ , 2016 年 11 月 18 日閲覧, 日本車椅子バスケットボール連盟.

日本車椅子バスケットボール連盟 n.d.c, 車椅子バスケットボール連盟の歴史, http://www.jwbf.gr.jp/history/ 2016 年 11 月 16 日閲覧, 日本車椅子バスケットボール連盟.

総理府, 1991,「欧米における障害者対策の動向」, 総理府障害者対策推進本部担当室.

渡正, 2012,『障害者スポーツの臨界点－車椅子バスケットボールの日常的実践から－』, 新評論.

＊＊

【編集後記】

『現象と秩序』第 7 号をお届けします．巻頭の特集『多文化異文化交流と学園都市的食生活』は，神戸市看護大学教員，神戸市外国語大学教員，および，神戸市外国語大学消費生活協同組合職員が共同で申請した研究経費に基づいてなされた研究をベースにしたものです．高齢化が進行しつつある，神戸市郊外のニュータウンという事情や，留学生が比較的多い外語大と，一人もいない看護大という事情に基づいた研究がなされていますが，その一方で，全国の地域や大学と同時代的状況を共有している面もあります．そういう眼で見て頂ければ幸いです．

特集以外の論説では，まず，飯田論文は、幼児に関するエスノメソドロジー・会話分析研究の成果です．幼児と母と祖母の 3 者間で，カテゴリーに関する理解の摺り合わせが複雑に高度に達成されていることが明白にわかる論考になっています．

桃井論文も，画像を大量に用いた授業研究になっています．また，アクティブ・ラーニング研究にもなっていて，その点では，特集の第一論文とも関連しています．

篠島ほか論文は，ALS 療養者のさまざまな工夫を扱った論文です．足の指で絵を描くにあたって，かつて建築関係の仕事で使っていた製図ソフトが流用されています．経路依存性研究としての質を持っているように思われます．

藤野ほか論文は，女子車椅子バスケットボール研究が扱われています．関西に 1 チームしか女子チームがない，ということで，通常は強化の困難が帰結されると思われるのに，インタビューによれば，国際大会準備として男子チームに混じって練習することが有効だ，という話になっています．一種の思わざる効果研究として成立していると思います．

次号には、特集：『社会学を基盤にした（ソーシャルワーク系）新専門職の可能性』が掲載される見込みです．ご期待ください．　(Y.K.)

＊＊

『現象と秩序』編集委員会（2017 年度）

編集委員：樫田美雄(神戸市看護大学)・中塚朋子(就実大学)・堀田裕子(愛知学泉大学)

編集幹事：坂根杏奈　(神戸市外国語大学)・平田菜津子　(神戸市外国語大学)

編集協力・印刷協力：村中淑子　(桃山学院大学)

『現象と秩序』第 7 号

2017 年　10 月 31 日発行

発行所　〒651-2103 神戸市西区学園西町 3-4

神戸市看護大学　樫田研究室内　現象と秩序企画編集室

電話・FAX）078-794-8074（樫田研）,e-mail:　kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN　：2188-9848

ONLINE ISSN　：2188-9856

http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html